

2013 年 11 月 13 日

全 6 頁



おカネはどこから来てどこに行くのか —資金循環統計の読み方—

第 5 回

銀行はキューピッド!?

金融調査部 兼 経済調査部 研究員
神尾 篤史



前は、保険会社を巡るおカネの流れについて説明しました。今回は、銀行の経済での役割と銀行を巡るおカネの流れに注目します。

銀行の役割は私達のお金のキューピッドになること!?

Q1 私達は銀行に預金をしていますが、銀行はそのお金をどのように使っているのでしょうか。

A1 銀行は私達のお金を個人・企業への貸出や国・企業等が発行する有価証券（株式や債券など）の購入（投資）に使っています。例えば、以下のようなケースがあるでしょう。

- 企業が新たな工場を建設するために、自前ではお金が不足するので、銀行からお金を借りる
- 国が道路や公共施設を作る場合に発行する国債を銀行が購入する

資金の余っている人・企業（預金をしている私達）から資金を必要としている人・企業・国に対して、資金を融通していることになります。第2回「[お金の流れの地図＝資金循環統計とは？](#)」で主体別にみて家計は資金の貸し手、非金融法人企業と一般政府は資金の借り手と説明しましたが、銀行（金融機関）はこの仲立ちをしているわけです。いわば、銀行は私達のお金のキューピッドの役割をしてくれるわけです。

このような銀行の役割を少し専門的にいうと間接金融と言います。つまり、資金の不足している人・企業・国が、銀行などを通して、資金を調達することを間接金融、一方で資金の不足している人・企業・国が自ら銀行などを通さずに、株式や債券などを発行して資金を調達することを直接金融と言います。

銀行の行動を別の見方でみると、預金という形で銀行は資金を調達し、貸出や投資を行うことでその資金を運用しています。その運用で得た収益（利子・配当金）の一部を利子として預金者に支払っています。

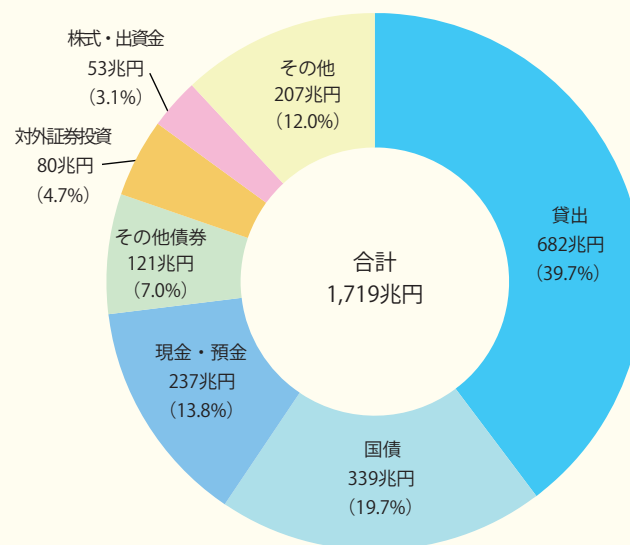
Q2 私達の預金などを銀行はどのような配分で貸出や有価証券の購入に充てているのでしょうか。

A2 具体的に「資金循環統計」を利用して、銀行の資金の使い方をみてみましょう。図表1は銀行などを含む預金取扱機関¹⁾の資金の使い方を示す金融資産の構成を表しています。これをみると、金融資産 1,719 兆円のうち、「貸出」が最も多く 682 兆円（構成比：39.7%）、次いで「国債」は 339 兆円（同：19.7%）、「現金・預金」は 237 兆円（同：13.8%）、「その他債券」は 121 兆円（同：7.0%）、「対外証券投資」は 80 兆円（同：4.7%）、「株式・出資金」は 53 兆円（同：3.1%）となっています。なお、「その他債券」には地方公共団体の発行した「地方債」や「社債」などが含まれます。

資金の使い方の中で最も大きかった「貸出」の内訳をみると、「企業・政府等向け」が 73.6%、個人の住宅ローンが含まれる「住宅貸付」が 24.7%、住宅ローン以外の貸出（例えば、教育ローン）が含まれる「消費者信用」が 1.7% となっています。

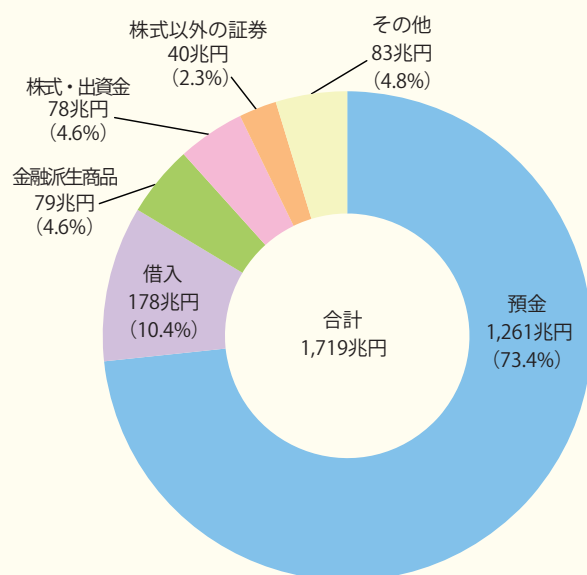
他方で、負債側である資金の調達の方法について見たものが図表2になります。これをみると、「預金」が最も多く 1,261 兆円（構成比：73.4%）となっており、銀行が預金で資金調達を行っていることが分かります。

図表1 預金取扱機関の金融資産の構成(2013年6月末)



(注)「国債」は「国庫短期証券」と「国債・財融債」の合計
(出所)日本銀行「資金循環統計」より大和総研作成

図表2 預金取扱機関の金融負債の構成(2013年6月末)

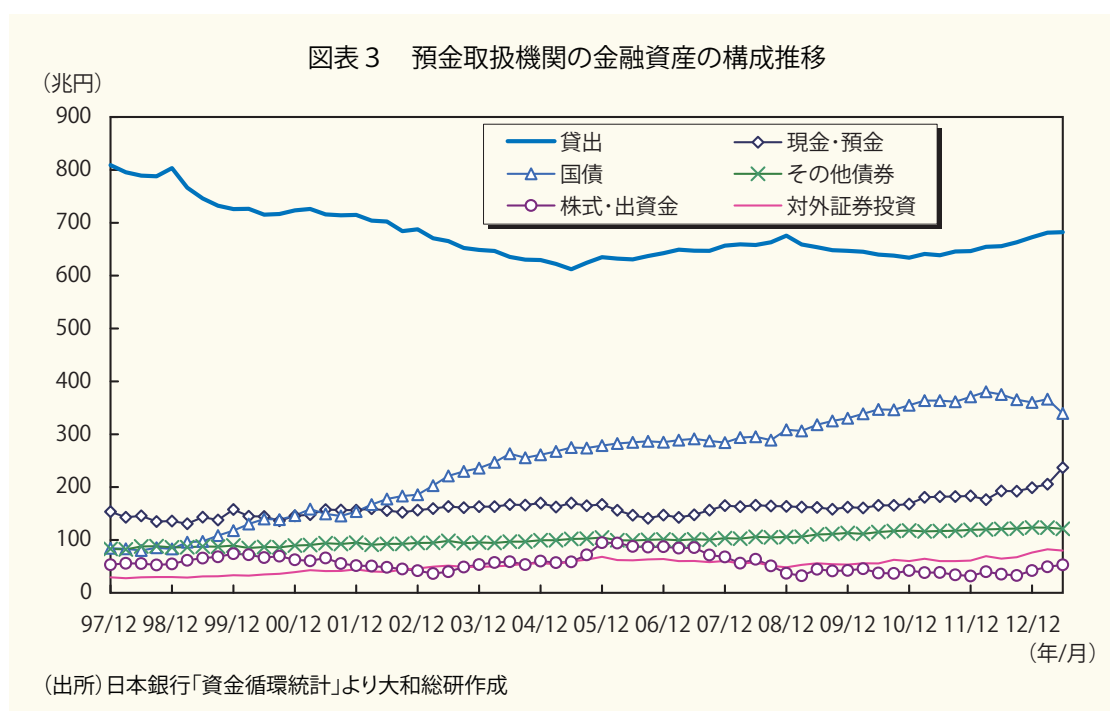


(出所)日本銀行「資金循環統計」より大和総研作成

1) 預金取扱機関は、預金を受け入れ、貸出を行う銀行などの総称。信用金庫、農協、国内に所在する外国銀行なども含まれます。

Q3 銀行の金融資産の内訳をみると、その大きな割合を占めるのが「貸出」と「国債」ですが、長い間、このような状況が続いているのでしょうか。

A3 図表 1 に掲載した項目の長期推移をみたものが図表 3 になります。「貸出」は 1997 年 12 月に 809 兆円に上りましたが、2005 年 6 月末には 612 兆円まで減少しました。銀行は、バブル崩壊後の地価などの下落によって、多額の不良債権を抱えました。銀行の貸出余力は低下し、また貸出に対して慎重な姿勢を取ったことが貸出減少の要因です。もっとも、最近では貸出がわずかに増加しています。このことについては **A4** で説明します。

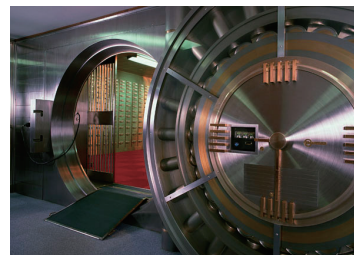


「国債」は一貫して増加傾向にあります。**A1**で銀行は預金という形で資金調達し、貸出や投資を行うことでその資金を運用しているとお話をしましたが、現状では貸出を減らして、国債の保有を増やしています。銀行は不良債権を抱えていたため、貸出よりも国債で資金を運用する方がリスクが低い（確実に収益を上げることができる）と考え²、国債の保有を増やしたと思われます。

2) その他、国際的に活動する銀行に対して課されるバーゼル規制が導入されたことも、銀行の国債保有が増加した要因と考えられます。バーゼル規制は銀行の自己資本比率などに関する規制で、自己資本比率は分子を自己資本、分母を銀行の保有する国債保有額や企業向け貸出などの金融資産毎に一定のウェイト（掛目）を乗じたもので計算します。この際に、国債保有額は企業向けと信に比べてウェイトが低いことから、銀行が自己資本比率を高めるために国債保有額を増やしたと思われます。

その他、「株式・出資金」は緩やかに上下変動を伴いながら、直近では 1997 年 12 月末と同程度の水準で 53 兆円となっています。「その他債券」は緩やかに上昇傾向にあり、直近では 121 兆円となっています。

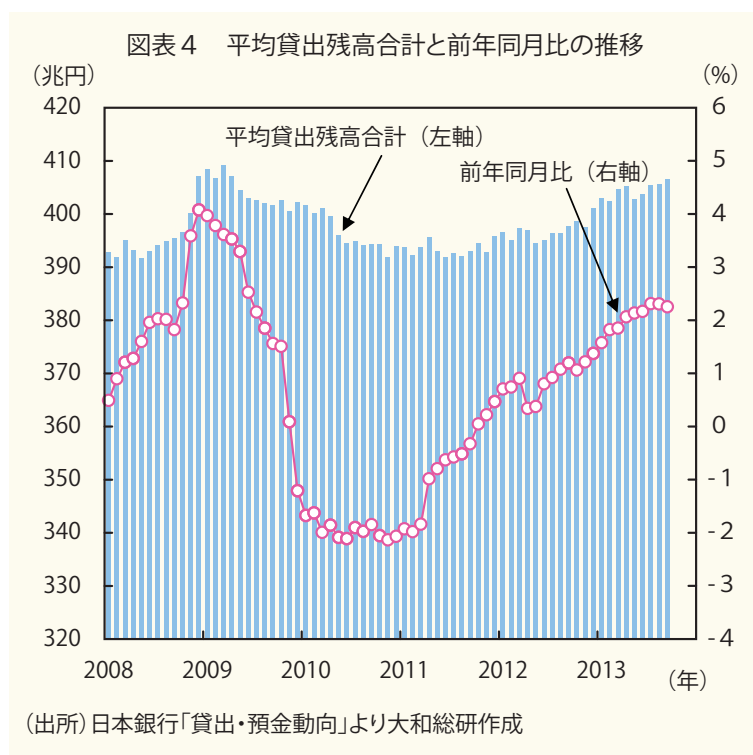
なお、国債や株式の保有については別に取り上げる予定になっていますので、詳細はそちらを楽しみにして頂ければと思います。



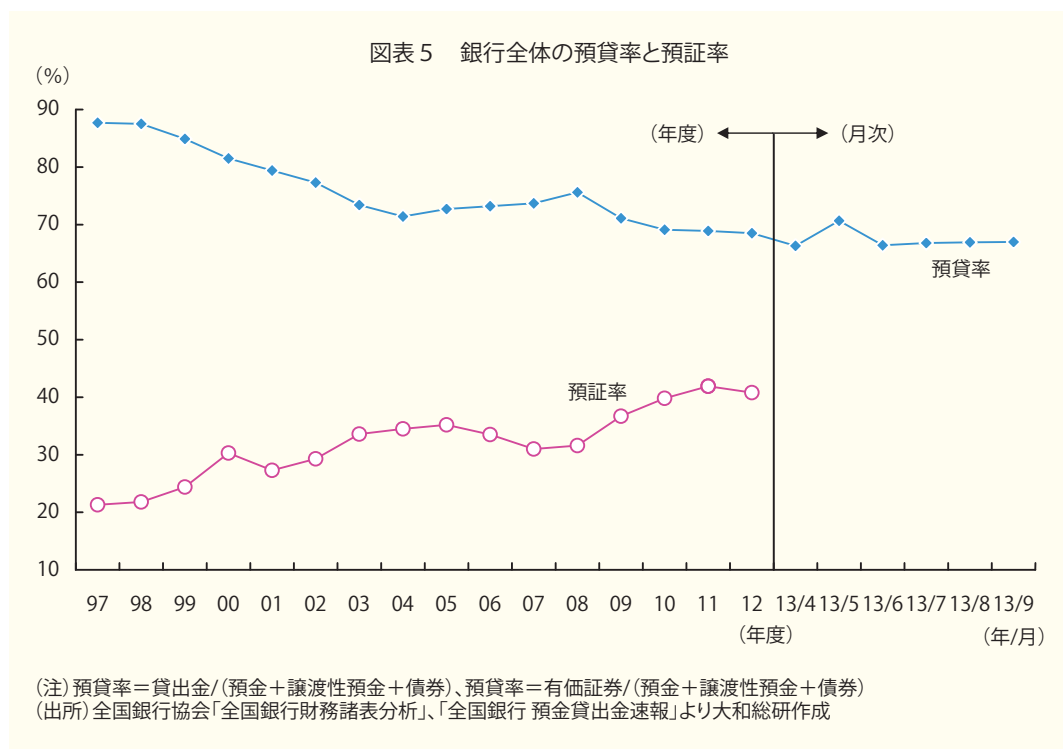
Q4 新聞報道等では日本銀行の「量的・質的金融緩和」の導入によって金融市場に多くのお金が流入し、銀行による企業等への貸出が増加するかが注目されていますが、貸出は増加しているのでしょうか。

A4 「資金循環統計」は公表される月の約 3 ヶ月遅れの情報が公表されるため（例えば、直近の 2013 年 9 月に公表されたデータは 2013 年 4 月～6 月のデータ）、速報性は低くなっています。速報性が高いものとして、日本銀行が発表する「貸出・預金動向」があります。この統計は国内の貸出を集計したものです。

この統計を用いて貸出の推移をみたものが図表 4 です。これをみると、直近の 2013 年 9 月は 407 兆円とリーマン・ショック後のピークである約 409 兆円よりも僅かに低い水準にあります。もっとも、足元では増加率（前年同月比）は 2 %を超えており、以前よりも僅かながら増加率が高まっています。



ただし、預金との関係でみると、貸出はまだまだ増加する余地があると思われますし、増加させていく必要があるでしょう。図表5は銀行が預金を貸出に使っている割合を示す預貸率と預金を国債などの有価証券に使っている割合を示す預証率を並べたものです。預貸率をみると、ようやく下げ止まり、横ばいで推移している一方で、預証率は、2012年度までの数値しかないものの、上昇傾向にあるためです。

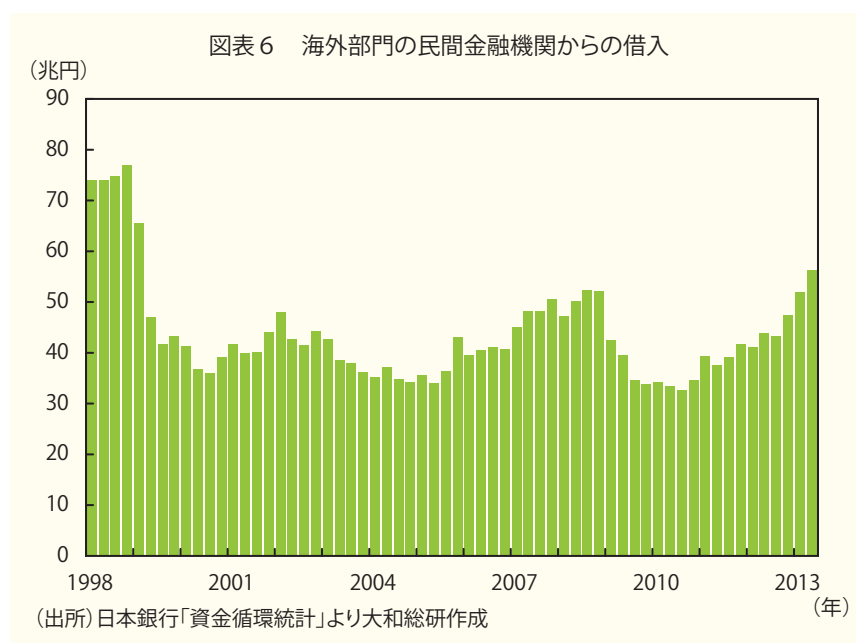


貸出の増加が持続するかどうかは景気の先行きに左右される面が強く、アベノミクスの三本目の矢である、成長戦略の成否にかかっていると思われます。

Q5 都市銀行などはアジア新興国を中心とした海外向け貸出を増やす計画を発表していますが、海外向け貸出を増やす意義とその現状はどのようになっているのでしょうか。

A5 **A4** でみたように、国内の貸出は僅かに増加傾向にあります。先行きは不透明な部分が多いです。対して、アジア新興国などは日本よりも将来的に高い成長が期待されていることから、都市銀行などはアジア新興国向けを中心とした海外向け貸出を増やす計画です。当該地域が成長していく過程で、必要となる資金も増加すると予想されます。都市銀行などは増加する必要資金に対し、貸出をすることで当該地域の成長を後押しすることに加え、貸出を増やすことができ、収益を増加させることにつながります。

資金循環統計を用いて、海外向け貸出（海外部門の民間金融機関からの借入）をみたものが図表6になります。これをみると、直近の海外向け貸出は1999年1～3月以来の高い水準となっており、順調に貸出を増やしています。



以上